

鯉のぼり職人 橋本 隆さん

手描きの鯉のぼりづくりに挑戦し続けてきた50年

一度は諦めた手描きの鯉のぼりづくり。だが「うちがやめたら手描きの鯉のぼりがこの世からなくなってしまう」と考えた橋本隆さんは、もう一度チャレンジすることにした。それも100年後、200年後、博物館に堂々と展示されるようなものを目指して。以来、橋本さんは、風をはらんで泳ぐ鯉のぼりがいつか龍に化身し、大空に飛翔することを夢見て「次はもっといいものを」と自らを奮い立たせてきた。鯉に恋して50年、今もその夢は諦めていない。

「これが欲しかったんだ」と客が絶叫

橋本隆さんは30年程前の出来事を、今でも鮮明に覚えている。

ある日、手描きの鯉のぼりを求めて高齢の男性がわざわざ千葉県からやってきた。当時は化繊の生地模様を印刷した鯉のぼりが市場を席卷し、橋本弥喜智商店も手描きの鯉のぼりは空いた時間を利用してごくわずかにつくる程度だった。それでも昔ながらの手描きの鯉のぼりを求める注文がポツリポツリと入っていた。千葉から来た男性もそんな客のひとりだった。ところがもともと数の少なかった手描きの鯉のぼりは、このときすでに在庫がなくなっていた。申し訳なさそうに橋本さんはそう説明し、頭を下げた。だが、その男性はそれでも諦めず、ずかずかと2階の作業場まで上がり込み、職人を見つけると「今からひとつ、つくれ」と無理難題を吹っ掛けてくるではないか。ほとほと困り果てた橋本さんはその瞬間、はたと思い出した。自分で考えたような絵が描けなかったため、倉庫の棚の奥に放り投げた鯉のぼりがひとつあったことを。急い

で倉庫まで行く橋本さんの後を、男性客もついてくる。そして橋本さんが棚から取り出したその鯉のぼりを差し出すと、奪い取るようにして広げ、「これだ、これが欲しかったんだよ」と破顔一笑した。それまで鬼のような形相だった客が、そのときはまるで仏様のような柔らかな笑みをたたえていた。

鯉のぼりを入れた風呂敷包みを大事そうに小脇に抱え、帰っていくその客の後ろ姿を見送りながら、橋本さんは思った。

「こんなに欲しがってくれるお客さんがいるなら、もう一度、頑張ってみよう」と。

手描きの鯉のぼりは絶滅危惧種？

埼玉県の加須市は鯉のぼりの産地として全国的に知られている。橋本さんが3代目の経営者として引き継いでいる橋本弥喜智商店も1908（明治41）年の創業以来、手描きの鯉のぼりづくりを続けていた。しかし、1960年代になると、化繊の生地印刷した鯉のぼりが版図を広げていた。木綿の生地に手間暇かけ



鯉のぼりをはじめ、五月人形なども販売する、橋本弥喜智商店。店の奥と2階が工房になっている。

て絵柄を手描きする昔ながらの鯉のぼりより、大量生産できる印刷ものの方が高い値を付けられていた。加須でも、この頃手描きをつくっていたのは橋本弥喜智商店だけになっていたほどだ。

手描きの鯉のぼりがほとんど売れない状況に、2代目の経営者で橋本さんの父親の橋本初雄さんはついに、印刷ものもつくることにした。橋本さんが入店したのは、ちょうどその頃のようだ。

幼い頃から絵が好きだった橋本さんに、初雄さんは「印刷用のデザインを考えろ」と命じた。そこで橋本さんはケント紙をつなぎ合わせ、烏口を使ってデザインを考えた。あとはそれを専門業者に渡して印刷するだけ。当時7~8人いた鯉のぼりづ



はしもと・たかし 1940年12月29日生まれ。株式会社橋本弥喜智商店代表取締役。埼玉県認定伝統工芸士。宇都宮の会社で5年間修業した後、家業の鯉のぼりづくりに入る。その2年後、父親が亡くなり、25歳で橋本弥喜智商店の3代目社長に就任。鯉のぼりの注文は毎年11月ごろから入り始める。翌年の4月末まではほとんど無休の忙しさになる。「手描きの鯉のぼりには、印刷やコンピュータでは決して出せない味があります」という。



(写真左上) 色付け用の顔料。(左下) 左は金の文様を描く金引き用の筆。右は先代から使っている刷毛。(右) 鯉の目を描く目廻し(めまわし)用の手製のコンパス。目の大きさは鯉の大きさに比例して決められている。

くりの職人は、毎日暇を持て余すようになってしまった。

そんなとき初雄さんが亡くなり、橋本さんは入店後わずか2年で3代目の経営者となった。ときは高度経済成長期。都会の企業から誘われて、職人はひとり、またひとりと櫛の歯が抜けるように減っていった。

「このまいうちがやめたら、手描きの鯉のぼりは世の中からなくなってしまう」

橋本さんの胸にそんな疑問が浮かんだ。ただ、橋本さん自身は、祖父からも父からも、手描きの技法を教わったことがなかった。そこで一計を案じた橋本さんは、職人ひとりずつに3メートルの木綿生地を渡し、こう提案した。

「自分の好きなように鯉を描いてください。そのかわり、100年後の人が、『こんな素晴らしいものがなくなってしまったのか、もったいない』というような鯉を頼みます」

その瞬間、どんよりとしていた職人たちの目が輝きを取り戻した。「好きなように絵を描いていい」などと、それまでは言われたことがなかったのだ。

自己流で身に付けた手描きの技法

そうして出来上がったものを持ち

寄り、品評会を開いた。「目玉はこれがいい」「うろこはの方が美しい」とそれぞれの作品のいいところを褒め合ったのである。そして「いいところを集めたら、きっと素晴らしい鯉のぼりができる。だからみんなで協力し合ってつくってほしい」と提案したのであった。

一方で橋本さんは職人たちの作業を見ながら、見よう見まねで手描きの技法を修得していった。現在、橋本さんは埼玉県認定の伝統工芸士だが、驚いたことにその技法は自己流で身に付けたものなのである。

だが、それでも手描きの鯉のぼりが売れることはほとんどなかった。橋本さんは金策に奔走し、職人はどんどん減っていき、とうとう橋本弥喜智商店に残ったのは橋本さんの家族だけになってしまった。

そんなある日、横浜の老婦人から「手描きの鯉のぼりをつくっていると聞いたので、ひとつ譲ってほしい」と電話で注文が入った。そして以後、同じような注文がときどき来るようになった。冒頭で触れた千葉県から来た高齢の男性客も、そのひとりであった。

それからしばらく経った夏、「まだ手描きをやっているんだって」と言いながら、ひとりの新聞記者が訪ねてきた。数日後、その記者が書いた小さな記事が新聞に掲載された。

「伝統の手描き鯉のぼりも今や風前の灯」というトーンの記事だった。だが、そんな記事でも人目に触れば反響を呼ぶ。やがて今度はテレビ局が取材に来た。そしてその放送を見て、今度は別の新聞社が取材に来た。

こうしてたびたびマスコミに取り上げられるようになってくると、人々の関心も集まる。その影響で、橋本弥喜智商店に直接、買いに来る客がどんどん増えていった。おかげで橋本さんは、客の意見や要望を直接聞くことができるようになった。問屋に卸していたころにはできなかった

(上) 縫製作業。ロール状に巻かれた木綿布の背ビレを縫い込み、袋状に縫い上げる。

(下) 薄墨といって、墨で筋書きしたところに顔料を塗り込む。



ことである。

100メートルの ジャンボ鯉のぼりも制作

「この鯉のぼり、なんだか品が悪いわね」

若い母親からそう言われたこともあった。「50年間、鯉のぼりをつくっていて、品が悪いと言われたのは後にも先にもあのときだけ」と、橋本さんは苦笑する。けれどもその若い母親に対し、怒るどころか、深々と頭を下げたい気持ちだったという。「自分がつくらなければ、この人が欲しがっている鯉のぼりは誰がつくるのか。そういう使命感があります。それに、悪口でも何でも、デザインに対する批評は、次の新しいデザインにつながるヒントになるかもしれません。だから、よくぞ言ってくれたと思ったのです」

客の要望を聞くだけではない。橋本さんは虫や鳥の羽を見て、デザインの着想を得ることもある。植物図鑑を見て、花のデザインを考えたこともある。ある洋画を見て「鳳凰」という名の鯉のぼりをデザインしたこともある。

こうして橋本弥喜智商店がつくる鯉のぼりのデザインはどんどん増えていき、今は33種類もある。かつては「まだやっているの」と言われた「手描き」が今は全国に知られるブランドになっている。おかげで職人総出で1年中つくっても、注文に追いつかないほどの忙しさだ。

1988年には加須青年会議所からの依頼で、長さ100メートル、重さ600キロのジャンボ鯉のぼりも制作した。このとき橋本さんは、鯉のぼりが空に揚がったらどう見えるか、イメージをつかむため羽田空港に何度も通っては、大型旅客機を観察したという。

このジャンボ鯉のぼりは一般市民が色塗りに参加してつくられる。加須市では毎年5月、クレーンで吊り

上げてジャンボ鯉のぼりを泳がせるのが恒例行事になっている。今年は延べ3,000人以上が参加して、新たに4代目のジャンボ鯉のぼりを制作した。

大空を飛翔する龍を見たか

現在、橋本弥喜智商店には橋本さんも含めて9人の職人がいる。ただし、金色の文様を描く「金引き」と呼ばれる最終工程の作業をできるのは、橋本さんと弟の勝さんだけだ。

「絵を描けるようになるまでは、最低でも10年はかかります。勢いのあるかすれやぼかしを描くのが難しい。私だってまだ一人前ではないですよ。だからひとつ描き終わったらいつも、次はもっといいものができるはずだと思います」

でも、思いを込めて描いた鯉のぼりは、必ず人の心を打つ。だから橋本弥喜智商店には全国の客から礼状が届く。「それがうれしい」と橋本さんは相好を崩す。

「顔料を使っているので、雨にも日光にも色褪せません。北海道にはうちの鯉のぼりを27年間、揚げ続けているお客さんもいます。あるお客

さんのところでは、うちの鯉のぼりを揚げている間だけ、近所の幼稚園の散歩コースが変わるそうです。子どもたちは楽しそうに鯉のぼりを見上げて、鯉のぼりの歌を歌いながら帰っていくと、手紙に書いてありました。自分の子どもが褒められたような気分で、最高に幸せですね」

中国には、鯉に関わる伝説がある。黄河上流にある竜門に泳ぎ登ることのできた鯉だけが、昇天して龍に化身するという登竜門伝説だ。鯉のぼりはこの伝説に由来しているという説もある。

「いつか、東京スカイツリーで巨大な鯉のぼりを揚げてみたい。大空を悠々と泳ぐ鯉のぼりを人々が見上げていると、空が一転俄かに掻き曇り、雷鳴がとどろく。そして驚いた人々が一瞬そらせた目を再び戻すと、そこにもう鯉のぼりはいない。そして私は『俺の鯉は龍になって飛んでいった』とつぶやく。それが私の夢なんです」

23歳から始めてすでに50年以上。鯉に恋して鯉のぼりづくりに一生を捧げてきたこの人なら、この途方もない夢を本当になんかえてしまうのではないだろうか。



利根川の河川敷で天高く舞い上がるジャンボ鯉のぼり。